

## 国際交流の架け橋に

日本移民資料館

令和7年10月23日に広島県のノートルダム清心中学校3年生の皆さんがフィールドワークの一環で来館されました。

皆さんは「国際交流」をテーマとして、柳井市や周防大島町をまわれ校外学習をされています。当館には、ハワイ移民につ



いて事前学習をして来館し、各班に分かれて展示資料の見学と私たちの話を聞いて、日本とハワイとのつながりや移民の実情をより深く知っていただきました。

後日、学校から生徒の皆さんの感想が送られてきましたので、一部をご紹介します。

### 《生徒の感想》

● 明治の頃から日本とハワイが交流してい

たことに驚くのと同時に、資料館の見学を通して交流の歴史や展示されている物を見て、これほど多くのものを受け継いだ皆さんの人々の存在を感じることができ、感慨深かったです。とても過酷な労働を強いられながらもたくましく生き抜いた移民の人々の精神は、現代の私たちにも必要な教訓の一つだと思いました。

● 想像以上に過酷な労働環境の下でも、生活するために必死で働いていた人々がいたと知って驚いた。広島からの移民が一番多いのに、このフィールドワークではじめてハワイ移民について知ったので、もっと多くの人にも知ってほしいと思う。資料館の展示品も昔から受け継がれている物がたくさんあって勉強になった。

● 日本からハワイに仕事を求めて渡った経緯や移民の日本に対する想いや家族との絆が分かった。また、ハワイでの過酷な労働生活の様子がよく分かる写真や道具、ハワイとの交流の歴史を伝える資料が多くあって、当時の様子をより深く、身近に感じる事ができた。

● 周防大島にハワイへの移民の方がたくさんいたということが、今まで全く知らなかったので驚きました。実際、1885〜1894年の日本からハワイへの移民全体の人数の半分近くが山口県から

で、その3分の1くらいが周防大島からと非常に多かったのだと分かりました。過酷な労働条件の下で、働き続けることで道具や知識を持ち帰ってきたり、そのまま留まることで外交を深めるきっかけとなったり、今にもつながる絆をつくったその事実が、目の前のことをこなしていくと後々にまで残る大きなものをつくる、そんなふう

● 事前学習でハワイ移民について分かっていたつもりでしたが、資料館での学びはそれよりもっと深掘りした内容でした。移民が多い理由はもちろん、移住した後の生活についても当時使っていた本や日記など細かく展示を交えて紹介しており、当時の移住の苦勞が分かりました。

このように、日本とハワイの交流史について、展示物から学びを深化させる機会としてくれたようです。

国際交流は関心を持ってもらう普及活動から始まるものだと思います。ハワイ移民の歴史や文化を知ってより身近に感じてもらい、将来の交流の架け橋となっていたいただければ幸いです。

Mahalo!!(マハロー) ありがとう

(藤元良哲)



陶芸作品展  
開催



学習のむらでは毎年、陶芸の館の陶芸定期教室とシニアクラブ陶芸教室の受講生と講師の作品展を開催しています。受講生の皆さんは作品展を楽しみに、新しい技術の習得にチャレンジしたりアイデアを形にしたりと作品作りに励んできました。今年度も個性豊かな作品が出来上がりました。一年間の成果をぜひご覧ください。

※今年も来場記念品をご用意しました。記念品は毎年変わり、今年が何かは来場してからのお楽しみ。なお、記念品には限りがあり先着順です。確実に入手したい方はお早めにこ来場ください。

【日程】 3月20日～22日

【展示時間】 9時～17時

(23日は16時まで)



◆同時開催 陶芸一日体験◆

気軽に陶芸を楽しんでいただくために作品展期間中に一日体験を開催します。今年はカップ作りを用意しました。材料を組み立ててマグカップを作り、スタンプなどで模様をつけます。材料は成形済みなので気軽に体験できます。マグカップの高さを好きな高さに調整することもでき、自分の好みのマイカップとしてつくることができます。楽しみながら陶芸の世界に触れてみませんか。

※写真は昨年作品です。

【受付時間】 9時～15時

(3月22日は14時まで)

【材料費】 1個1000円

(限定20個、先着順)

【場所】 八幡生涯学習のむら

ふれあいの間・商いの間

【問合せ】 0820・72・2601

ハワイ移民寄贈の電気オルガンと

星野哲郎作詞

「お茶がゆの歌」



八幡生涯学習のむら

「ハブ茶にほうじ茶 濃茶(こちや) 薄茶(うすちや) ハワイの

親戚帰ったら 名古屋にいる子が戻ったら お茶がゆ作って喜ばそ

学習のむらでのコンサートで歌われた星野哲郎作詞「お茶がゆの歌」の一節です。令和7年10月5日、久賀歴史民俗資料館ではハワイへ移民された新田一(ひとし)氏から寄贈された電気オルガンを補修し「ハワイ&ふるさとの歌」と題して記念コンサートを開催しました。

新田氏は明治42(1909)年生まれ。子ども時代は周防大島町久賀ですごされました。大正12(1923)年にハワイへ渡り、一時帰国後、移民していた父に呼び寄せられて昭和15(1940)年再びハワイへと赴き、その後はハワイで過ごされたようです。オルガンは子ども時代をすごした久賀をしのんで贈られたものかもしれません。

コンサートは久賀公民館で活動されている「童謡を歌う会」に協力いただきました。当日のプログラムは「南の島のカメハメハ大王」「もみじ」「故郷」と懐かしい歌がラインナップ。



プ。そして特にご来場の皆さんに喜ばれたのが星野哲郎作詞の「お茶がゆの歌」です。「茶がゆ」は周防大島町のソウルフード。今でも夏の暑い日には冷やした茶がゆが一番!という方も多く、食欲がないときでもさらさらと食べられ体力を保てること親しまれている一品です。茶がゆには家ごとに豆やイモを入れます。「お茶がゆの歌」には「芋がゆ、豆のかゆ」や「小豆がゆ」と豆が歌われています。豆と元気を意味する「マメ」をかいたのでしょうか。ハワイの親戚や遠くにいる子どもたちが帰ったら茶がゆを食べさせてやりたい、という歌詞には健康を祈る思いがこめられているようです。

コンサートでは予定外のアンコールの声もかかり、リクエストはもちろん「お茶がゆの歌」。歌の間にはフラの披露もあり、周防大島とハワイに思いを寄せ、楽しいひとときを過ごすことができました。オルガンは久賀歴史民俗資料館に

展示中です。ぜひ故郷への思いをのせて寄贈されたであろうオルガンに会いにきてください。

健康づくりを応援!



新しいランニングマシン入荷しました!

周防大島町総合体育館

トレーニングルームに、新しいランニングマシン「ラボードNEXT(ネクスト)」が仲間入りしました。「ラボード NEXT」は、走行面のクッション性にすぐれており、歩いたり走ったりするときの衝撃をやわらかく受け止めてくれます。ひざや腰への負担をやさしく抑えてくれるため、運動が久しぶりの方や、体力に自信のない方にもおすすめです。ウォーキングはもちろん、少し汗をかきたいときの軽いランニングまで、その日の体調や気分に合わせてご利用いただけます。スピードや傾斜は細かく調整できるので、無理のないペースで、自分らしく運

- **【利用料金】** 1回220円
- **【設備】**
  - **有酸素運動系** エアロバイク、ランニングマシン等
  - **筋力トレーニング系** チェストプレス、ショルダープレス等
  - **ストレッチ系** ベルトマッサージ機、ストレッチャマット等
- **【利用時間】** 9時～21時 (金・土・日・祝は17時まで)
- **【問合せ】** 総合体育館 0820・78・2512

久賀歴史民俗資料館 開館50周年

令和8(2026)年6月、久賀歴史民俗資料館は開館50周年を迎えます。

郷土博物館を作ろうという思いは『久賀町誌』が出来上がった昭和27(1952)頃からありました。この思いは昭和47年頃の宮本常一の言葉を引きつかけに実現にむけて動き出し、昭和51(1976)年開館を迎えました。この時、町誌編纂から約24年がたっていました。この間の久賀の人々の郷土への思いが宮本にはよくわかっていたのでしよう。宮本は「平凡だけれど風格を持った町」

だと書いています。なぜ、久賀の人たちは自分たちの日常の暮らしとそ中で使われた民具に思いをよせたのでしょうか。 慶応2(1866)年の幕府と長州の戦い「四境の役」で久賀は町の半ばを焼失したといわれます。その後、久賀の町の復興のために港を作



り、大阪と行き来する船に寄港してもらおうよう努力しました。寄港が成功すると、船の旅客のために宿や料理屋が立ち並び、久賀の町は賑わいを取り戻していきました。慶應2年に6歳だった人は昭和27年では86歳です。戦いを見た祖父母から直接町が失われた話を聞いた人も多かったことでしょう。資料館設立のために寄贈された民具は久賀の人々にとつて焼け跡から立ち上がった復興の証だったのかもしれない。

この写真は、久賀歴史民俗資料館に収蔵されているひな人形です。四境の役を体験した人々にとつてはこのようなひな人形を飾って祝える日は感慨もひとしおだったのでしようか。

評伝・宮本常一  
第五回  
終戦前後の学問



宮本は昭和14（1939）年10月に東京市芝区三田綱町（現東京都港区）で渋沢敬三が主宰するアチック・ミューゼウムに入って全国各地で民俗調査を行うようになります。しかし戦争が激しさを増すなかで調査旅行を続けることが難しくなり、昭和18年12月には戦禍を逃れるために妻子のいる大阪府泉北郡鳳町（現堺市）に戻りました。そして昭和19年1月から昭和20年4月まで、奈良県立郡山中学校で嘱託教員を勤めました。その後、大阪府知事からの要請を受けて府の農務課嘱託となり、昭和20年5月から12月までは食料自給に向けての対策を立てるために府下農村の実情調査をします。この8ヶ月で農村に出ている日数は実に155日に及んだといえます。

この間、7月には大阪で空襲被害に遭い、それまで民俗誌を作成するために蓄積していた調査資料や蔵書、書き溜めていた原稿の大半を失ってしまいます。10月には集団で移住して開墾に従う人々を北海道の天塩地方まで引率し、続いて先に移住していた人々の様子を見るために道内各地をまわりました。

ところで、宮本は自身の体験を通して物事を論じることが多い民俗学研究者でしたが、特に農業の問題に對してはその傾向が強かったと思います。『民俗学の旅』では次のように述べています。

「民俗学という学問は体験の学問であり、実践の学問であると思っているが、それは幼少時の生活のあり方にかかわるところが多いのではないだろうか。私は幼少期から少年期にかけて土を耕し種子をまき、草をとり草を刈り木を伐り、落葉をかき、穀や麦を刈り、いろいろの穀物の脱穀をおこない、米を搗き、臼をひき、草履を作り、菰をあみ、牛を追い、また船を漕ぎ、網をひいた。そして何故それをしなければならぬかを父祖に教えられた。きびしい教訓としてではなく、百姓の子としておこなわねばならぬこととして、また一つの物語りとして身につけさせられたのである。そしてその延長の上にも生きつづけている」。

幼少時は家を維持するために辛苦の多い農業を体験し、戦時中は大阪府農務課嘱託として府下農村の実情を調べ、戦後も特に昭和24年頃までは全国各地で農業技術や農家経営の視察と指導をして歩きました。

そうしたなかで、宮本は書物に書かれた学問の世界と現実と形成されている世界には大きな隔たりがあることを痛感します。そこで、農家が抱える問題を外側から研究対象として見るだけでなく、内側から仲間事として見ようと思いました。それは、「私も百姓の子であり、今でも家へ帰ると鍬鎌を持って田へゆく。だから百姓仕事は一通りできる」と自称する宮本であればこそ採れる立場であり、方法でもあったと思います。

宮本の学問は時代の要請に應じて柔軟にたちを変え、極めて現実的なものでした。特に終戦前後は行政の立場から実務的な仕事に取り組みました。その内容は、「令和の米騒動」と称される現代の食料問題を考えるうえでも非常に示唆に富むものです。宮本の学問は、決して民俗学研究の枠内に留まるものではありませんでした。

- 日本ハワイ移民資料館 今後の予定  
〜大島大橋50周年企画として〜
- ★ **ハワイ移民ドキュメンタリー上映**
  - 【主催】 NPO法人NAC:j  
(神奈川県・松元裕之)
  - 【日時】 7月中旬〜8月
  - 【会場】 大島文化センター
  - ★ **第2回ハワイアンキルト展**
  - 【主催】 日本ハワイ移民資料館  
(指定管理者：大島国際交流協会)
  - 【日時】 令和8年7月中旬〜8月末  
(休館日除く)
  - 【会場】 日本ハワイ移民資料館
  - 【募集内容】
  - ハワイアンキルトに限定
  - サイズ 1m×1m
  - 一人一点
  - 作品20点程度を予定  
(応募多数の場合 前期・後期に分割展示もあり)
  - 作品の提出時期  
2026年7月上旬までに
  - 日本ハワイ移民資料館へ各自で作品の中より大賞を付与予定
  - 《キャッチー中島の作品展示あり》
  - 【問合せ】 日本ハワイ移民資料館  
0820・74・4082